



生活指導の基礎的研究

——言語と行為の関連および役割の認識について——

桐井玲子

幼児期は、指導者と被指導者との心理的、社会的勾配関係の著しい時期であり、それだけに、指導者の感化、影響の著しいことが考えられる。このことは、生活指導をやりやすくもすれば、むづかしくもしている。子どもの自己活動を尊重する生活指導の立場からはどうのようなことに気をつけたらよいだろうか。

へⅠへ

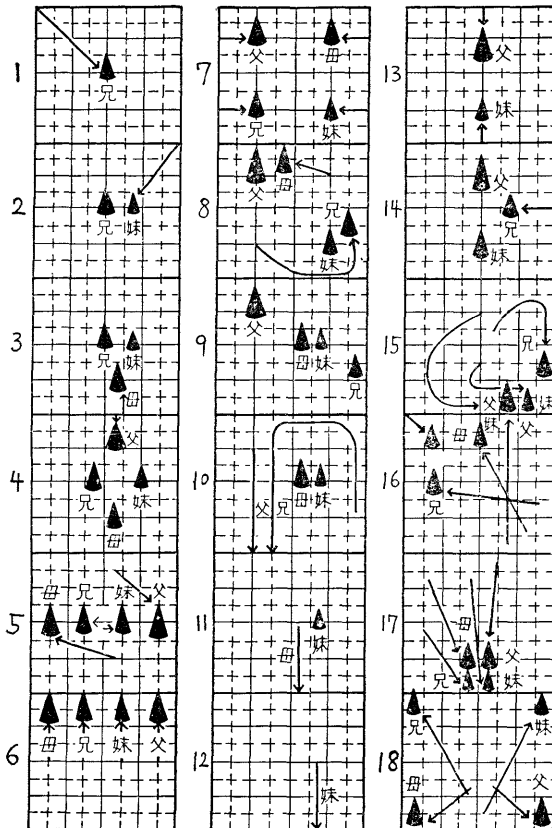
指導者は、しばしば言語による生活指導をおこなう。その場合は、子どもにおける言語と行為の関連の仕方がよく理解されていなければならない。しかし、これについては従来あまり研究がおこなわれていない。この点をあきらかにするのが本研究の目的であった。

【研究方法】実験材料・(A)家族人形として各々高さ4 cm、5 cm、6 cm、7 cmのケント紙を用いた白色円錐型四個。(B)活動領域としての敷紙一枚(40 cm²)。(C)補助材料として、マッチ箱大のハコ一個。高さ4 cmの実験人形と同型の円錐型一個。(D)物語一篇(後述)。(E)

ストップウォッチ (F) 記録用紙 被験者 幼稚園(渋谷・鶯谷さくら幼稚園および、新宿・高千穂幼稚園) 児、男女各二〇名、小学校(大森第三小学校) 二年生、男女各二〇名、計八〇名をランダムに出した。実験手続 (A) 行為の言語化に関する実験。幼児は保育時間中、小学生は放課後、ひとりずつ実験室につれてはいい、机に向かって実験者と並んで坐るようにする。並んで坐ってから、被験者とのラポートをつけるために「お名前は」「年は」などといくつかの会話をする。〈教示〉「今から〇〇ちゃんとしょにお人形さんのあそびをしましょう。私がここに出したのは、これからあそぶお人形です。みんなでいくつありますか?(この場合人形をはっきり認識させるためであるから、まちがってもよい)では私としょに大きな声でかぞえてみましょう。ひとつ、ふたつ、みっつみんなで四つありますね。このお人形さんはお父さん、お母さん、お兄さん、妹さんの四人です。〇〇ちゃんだったら、どれをお父さん、お母さん、お兄さん、妹

さんになりますか？それでも〇〇ちゃんがいいと思うのにきめて下さい。きまりましたね。それでは、それぞれのお人形が誰だったか〇〇ちゃんがよくわかるようにしるしをつけて下さい。(青、緑、黄、はだ色、の折紙でつくった細い輪をわたす。それを任意に人形の首にかけて目じるしとする)。出来ましたね。では、どれがお父さん、お母さん……か私に教えて下さい。どうもありがとう、よくわかりました。それではお人形あそびをはじめましょう。これは四人家族のお人形あそびです。お人形さんですから、何を話しても、どんなことをしてもいいのです。では私がお人形を動かしますから、〇〇ちゃんは、それをよくみてお話をつくって下さい。教した後、下図の順序で人形を操作する。人形操作後、一二〇秒以上たっても、言語反応が現れないときは、そこで打ち切って、次の人形の操作にうつる。記録方法は、あらかじめ用意した記録用紙に被験者の言語表現、態度などをそのまま速記する。反応初発時間をストップウォッチで測定する。いずれも被験者に刺戟をあたえぬよう注意する。〈人形操作の順序並びに配置〉下図。

実験手続 (B) 言語の行為化に関する実験。被験者は(A)と同じ。(A)の実験終了後、被験者に次の実験への興味をもたせるために動機づけとして、賞讃、げきさいを適当に与える。〈教示〉「では今度



は私がお話をしますから〇〇ちゃんがこのお人形を動かして下さい。(補助材料を指示して) これは何に使ってもいいものですから、〇〇ちゃんが使いたい時に入れて下さいね。では、はじめましょう。お話をよく聞いて下さいね。次に準備した話をゆっくりと同一速度で話す。言語刺戟を与えた後、一二〇秒以上経過しても、行為化のない時は次にうつる。

〈物語〉「ある朝です。お母さんは御飯の仕度をしに行きました。

お父さんは、花に水をやりに行きました。妹は御飯を食べる台の上にお茶碗やお箸を並べています。御飯が出来ました。みんな仕事をすませて、朝御飯を食べました。日曜日です。お父さんは、御飯がすんでから庭へおりました。そして、鶏小屋をなおしています。お母さんはお部屋のそうじをしています。正夫さんと花子さんは、子ども部屋で積木をしてあそんでいます。「誰かこの板を、おさえていてくれないか」とお父さんが呼びました。「はい」といって、誰かが走って行きました。「みんなで鶏小屋にはいつてみようか」とお父さんが言いました。それでみんな鶏小屋へはりました。みんな夕方御飯を食べています。」「めん下さい」と誰かの声がありました。

「はい」といって、誰かが出て行きました。しばらくして、玄関に出た人が帰って来ました。手に何か持っています。何だったでしょう。夕御飯がすんでから、別の部屋へ行って、みんなでテレビをみることにしました。正夫さんは野球をみようと思つて、テレビの方へ行きました。花子さんは「まんがをみせて」と言つてテレビの方へ行きました。正夫さんが「まんがなんかいやだ」と言つたので、けんかになってしまいました。お母さんが来て、「仲よくみなさい」と言いました。お父さんは黙つて部屋の外へ行ってしまいました。」

実験手続 (C) 実験(A)と(B)とを併用した実験。被験者は、(A)(B)と同じ。(B)の実験終了後、次の指示をする。この実験は、(B)の実験に用いる話が、葛藤場面で終結するので、被験者の心理的緊張解消を、はかり、あわせて、物語の把握の仕方、問題解決の態度などを、調

査するために、準備したものである。〈指示〉「これで私のお話は終ります。さあ、こんどは○○ちゃんが、このお人形さんのお話を續けて下さい。それからどうなったかしらね」と言いながら人形を被験者にわたす。「さあ、このお人形さんを使ってお話しして下さいね」。

実験所要時間は約二〇分であった。

実験の結果 実験(A)の人形の動きに即して展開される言語表現の反応初発時間と、実験(B)のお話を聞きながら人形を操作する行為反応時間とを比較すると、幼児は、(A)における言語反応初発時間が、(B)における行為反応初発時間よりも速いものの人数の方が多く、 $(\chi^2=4.9 \quad df=1 \quad P(0.05)=3.84)$ また、小学生に比較しても、(A)が(B)よりも速いものの人数は幼児の方が多い。

$(\chi^2=34.3 \quad df=1 \quad P(0.01)=10.83)$ 。その反面、小学生においては、(B)が(A)よりも速いものの人数は幼児よりも多い。

$(\chi^2=15.54 \quad df=1 \quad P(0.01)=10.83)$ 。

このことは、幼児における行動的思考の特徴と、小学生における概念的思考の特徴を示していると思われる。幼児においては、行動をみて、それを一度概念化して言語表現をするというよりも、動きそのものの中に、言語をとらえ、言語を育てていくと言えよう。このことは、実験(A)において、幼児は、人形の動きをみてお話をつけながら、さらに自分で人形を動かしてお話を続けるものが、小学生よりも、多かつたことから考察される。 $(\chi^2=10.7 \quad df=1 \quad P(0.05)=3.84)$ 。

生活指導は、家庭でも、幼稚園（保育所）でも、一貫した方針のもとにおこなわれるべきである。そのいずれの場合にも、子どもの把握している生活領域や、家庭における人間関係の把握の仕方を理解していなければならない。それを理解する方法として、次のような試みをおこなって、生活指導の手がかりを得た。

研究方法、実験材料、被験者は、Iに同じ。方法として、Iにおける(A)の実験によって得られた言語反応（お語）を内容的に分析する。

(1) 生活領域のひろがりと役割の分布

具体的事象（人形）の動きに即して、構成される、幼児および小学生の生活領域の認識はどうなっているか。父母兄妹の役割をになう、四個の人形がどのようにあつかわれるだろうか。これらを理解することにより、日常生活生活において、どのように他者の役割を認識し、また自ら役割をとってふるまえるかを考える手がかりとする。

① まず人形の動きに即して展開される言語表現は、次の基準によって、分類した。

- (A) 日常生活 @家庭内における活動。⑥家庭外における活動。
- あつても家族以外の人とのつながりをもたない活動。
- (B) 社会生活 @家庭外で他とのつながりをもった活動。①家庭内における社会的活動。

- (C) 文化生活 @文化を享受する生活。①文化財を使用する生活。
- (D) 概念生活 @思考活動を中心とした生活。①空想的生活。②物語上の生活。

この分類の結果、幼児、小学生ともに、日常生活④⑤に関するものが、最も多いことがわかった。（サインテストによる。その中でもとくに遊びに関するものが多い）。ついで、社会生活④、社会生活⑥、文化生活⑥、文化生活①、概念生活⑥、概念生活③④の順であり、幼児は、小学生にくらべて、空想的な生活に関するものが多いことがわかった。生活指導にあたっては、このことがじゅうぶん考察される必要がある。

② 次に、父母兄妹、相互間の役割の分布についてみよう。

被験者の言語反応を、生活維持。生活上。生活調整。勉学教育。娯楽。教育。労働生産（家庭、社会）遊び運動（個人、集団）。自治。保全。消費分配。伝達報道。交通。保健衛生。社交訪問。心理的状态。の十六領域に分類した。その結果、全般的に生活維持、生活上、生活調整に関する役割の多いことがわかった。父においては社会における労働、母においては家庭における労働、兄妹においては、あそび、勉学などが多し。（コフマンQ法による。労働（社会）父の多いもの。Q=幼（男）11.42 幼（女）14.50 小（男）32.50 小（女）35.20。労働（家庭）母の多いものQ=幼（男）13.26 幼（女）16.28 小（男）30.60 小（女）52.08。あそび・勉学、兄妹の多いものQ=幼（男）23.43 幼（女）24.62 小（男）28.32 小（女）23.63。df=1 P（001）=13.82）

これらのことから、家族関係における役割の認識の仕方や役割への期待の一端を知ることが出来る。

(2) 人間関係の成立の頻度とその過程

父母兄妹の役割を与えた人形の動きから、子どもはどのような人間関係を把握し、それを展開させていくことができるかをみる。それによって、生活指導において、自己の立場を確立し、自己・他者との関係を発展させていく手がかりを得る。人形あそびにおける言語表現から、この人間関係を考察すると、一般的に、一人関係的な把握が多く、ついで二人関係、四人(全体)関係の順で三人関係の結ばれる機会が少ないことがわかる。(一人関係として把握したもの。母(母) 51% 姉(姉) 43% 小(男) 56% 小(女) 47%)

各項目別にみると次のようである。

父と妹との関係√父と兄との関係

母と妹との関係√母と兄との関係

兄と妹との関係√父と母との関係

妹と父母との関係√兄と父母との関係

いずれも妹との人間関係が多く結ばれている。(サインテストによる)

人間関係の成立は、コミュニケーター(伝達者)とコミュニケーター(被伝達者)との相互交渉によって成立するが、この相互間の働きかけの回数を、個人別にあるいは、年齢別にみるることによって生活指導の手がかりとする。本研究における人間関係成立の回数

次のようになった。

父母から子どもへ√子どもから父母へ

妹から兄へ √兄から妹へ

母から子どもへ √父から子どもへ

(いずれもサインテストによる有意差あるもののみ)

このことから、家庭生活における、親子関係の結ばれ方を洞察することが出来ると共に被験者が、子どもと同一化して自己の欲求を表現するよりも、親と同一化して自己の欲求を表現しようとする傾向がみられる。生活指導においては、人間関係を理解させ、人間関係のいろいろな型を体験させ、そこで自ら役割をとってふるまえるように指導することが考えられる必要がある。

Ⅲ

人形あそびを通しての生活指導

本研究では、人形あそびを通して、その場で、子どもの生活指導がなされることも考慮して、研究がおこなわれた。方法としては、なるべく規定性を少なくして、子どもが自由に人形に働きかけて動かすことが出来るようにした。また、実験(C)においてもこのことを考慮した。こうして得られた個々の結果については次の機会にのべる。

(この研究は、昭和三十三年四月から一か年にわたって、お茶の水女子大学児童学科において、松村康平氏の指導の下におこなった研究の一端である。(西南女学院短期大学)